奈良教育大学紀要　第43巻 第1号（人文・社会）平成6年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 43, No. 1 (Cult. & Soc.), 1994

小学校における性教育　序論

後藤誠也・高森裕子*
（奈良教育大学教育学教室）

（平成6年4月28日受理）

はじめに

「どうやって私は生まれてきたの？」という問いは、子どもの素直で素朴な疑問である。しかし、「お母さんから生まれてきた」ということは語れても、お父さんとの関わりを、いったい何人の大人が語り得るだろうか。子どもはまだ知らなくてもいいと、大人が大人の都合だけで子どもの疑問を切り捨て、あるいは歪めているのが現状と言える。文字や計算に子どもが興味を示せば、大人、特に親は喜び、他の子どもと競わせることもする。しかし、性に関わること（からだのこと）に興味を示しはじめた子どもを、いったい誰が喜び、応援してくれるだろうか。大人が持つ「性を語ることはタブーである」という考え方は、たぶん大人だけのものだろう。何ごとにも興味や関心を持つ子どもが、他のことと同じように、自分のからだのことを知りたがっているのなら、正しく教えることが大人のそして親の当然の行為ではないのだろうか。

大人は、性（セックス）の差異に対し、当然のこととして性役割（ジェンダー）を重ね、子どもたちに押しつけている。性役割は、性の差異を前提としているのに、まの前提に関しては何の説明もなしに、性役割のみを強調する。前提としての性をじゅうぶん知ることなしに、子どもたちは性に関し、ある種の偏見を持ちながら性役割を受容していく。

性教育は、自分と他人のからだと性に関わるもろもろを、正しく理解させるための教育指導であるが、同時に、自分らしく生きていく力量を培っていく教育でもある。しかし、今の学校教育現場で、性教育は、はたして自分らしく生きていくための教育となり得ているのだろうか。小学生は、まだ世間の誤った性情報に完全に捕えられてはいない。従って、性についての正しい知識や態度などを、親や教師が、一番教えたり伝達したりしやすい時期と言える。この時期に、親や教師は、迷うことなく性教育を行なっているのだろうか。

以下では、特に教師側の問題を含みながら、小学校の現状を中心に序論としての分析と問題提起を行なってみたい。また性教育の実践において教師に何が求められるのかをも、後藤と高森両者の授業経験を通しながら、実践の課題として提示してみたい。

性教育では、多様な内容を扱うことが要求される。からだを中心とした生理的、機能的な分野は基礎として当然としても、自分の性の納得と受容に関わる心理的な分野、異なる性で成り立っている社会の人間関係や人権という視点からの、性役割や他の性の尊重という社会的側面も含まれてくる。本論では、それらすべての分野に広く関わると認識でき、また一方では現時点での性教育論で、特に問題となっている「性交」のテーマを、性教育論ではまた学校では、どう扱っているか、また扱っていくべきかに焦点をあてることにする。それは、従来、学校であまり直接にふれてこなかった聖域であり、また一方では生命の誕生という、性教育では重要な内容を扱うときに、パスできない重要な道筋の結節点となっているからである。

* 現在　奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程

I　性教育をどう捉えるか

1　これまでの性教育

(1)　戦後の性教育

敗戦を契機に、日本では占領軍兵士を相手とした売春婦が目立ち、また外地からの復員兵は多くの種類の性病を持ち帰った。政府は、私娼の取り締まりや保護対策を審議し、これを受けて文部省は1947年に、純潔教育の実施の通達を発した。これは、性教育を公的に取り上げた第一歩であった。純潔ということばが使用された理由は、次の二つ、つまり「わが国では、性教育ということばが、まだ一般化されていないので、ごく狭い意味にうけとられるおそれがある点と、平明で使いやすいという点」[1]であった。

しかし、1949年に出された「純潔教育基本要項」の付録として出された「性教育のあり方」の中では、「性的交渉は、結婚当事者間におけるもののみを純潔と認める」[2]と、定義されていた。この考え方によって、純潔というのは、結婚までセックスをしないことという認識に落着していったのだが、性道徳の混乱を正そうとする意図とこの純潔観が、定義の底流にあったことは否定できないだろう。

純潔という語に対応する英語に chastity がある。これは「法に反したあらゆる性的な活動に携わらないこと、姦通しないこと、そして童貞・処女を守ること」[3]という意味を持つ。性教育の先進国には、sex education や sexuality education はあっても、chastity education はない。戦後間もなくの性教育は、純潔という語に付きまとう日本的な道徳観に沿わされたものであったと言えよう。

純潔教育が、性教育という用語に置き換えられたのは1970年ごろである。性の解（開）放や女性解放の運動が顕著となり、性のダブルスタンダードに反発する社会風潮が生まれ、純潔なる語に含まれていた過去の禁欲思想を砕こうとする姿勢が伺いとれる。これにはマスコミの開放的な性情報の発信の影響も含まれてはいるが。しかし、マスコミ主導型の性解放は、性の価値観を多様化させたが、それに教育的な配慮が十分なされていたか否かには、問題が残されていた。

1980年を迎えたころから考慮すべき問題がクローズアップされてきた。それらは、十代の中絶増加、AIDS、歪んだ形でマスコミから提供される性情報、離婚率の上昇などである。十代の中絶は、曖昧な避妊知識しか与えない教育と、子どもが子どもを産むという表現があてはまるほどの貧困な教育、育児をしながら通学することを可能とする経済的、精神的な支えや環境の未整備、などの問題を含んでいた。これらの問題は、日本人の性意識とも関わって、より複雑で難解な問題でもあった。学校に通う時間が長くなれば、それだけ性的モラトリアム期間も長くなる。一方、子どもたちの身体的成熟は早期化してきている。この不均衡は、子どもたちの性行動を社会規範の外に押し出そうとしている。

現代では、男女ともに昔に比べて多様な生き方を選択しうるようになってきたが、反面、性に関しては禁欲を子どもたちに強いる形で、拘束力を強めているとも言えよう。近年ようやく市民権を得はじめた同性愛、独身主義、DINKS なども、結婚して子どもを持ってはじめて一人前という、わが国の精神的風土が変らないかぎり、日本社会に広く浸透、定着していくことはなかろう。

このような状況から、現在、性教育のあり方は一つの転機を迎えていると言える。戦後の性教育の歴史は、大別次の三期に分けることができよう。ア、純潔教育期、イ、Sex education 期、ウ、

Sexuality education 期がそれである。現在は、第三期と言えるが、多様な生き方を認めあうための真の教育がなされているかどうかは、まだ疑問の状態と言える。

ところで、現代の性教育学者（団体）は、俗に推進派と慎重派とに二分されている。前者は、山本直英氏、村瀬幸治氏らであり、団体としては“人間と性”教育研究協議会（以下、性教協という）である。後者は、田能村祐麒氏、高橋史郎氏、松岡弘氏、石川哲也氏らであり、団体としては日本性教育協会（都道府県や市等の教育委員会が後援している）である。前者も後者も、性教育は性器教育ではなく、人間がどう生きていくかに関わるトータルな生き方教育、だと捉えている点では相異はないが、こと指導法となると、発達段階やレディネスをめぐって、意見に激しい食い違いが生じる。

例えば、性教育は性器教育ではないという、両者の共通点をとってみても、「性器を教えずして、性教育はない」[5]とする山本氏に対し、慎重派は「（性教育は性器教育ではないから）性器を教える必要はない」[6]と、正反対の見解を提起している。

山本氏はたびたび、性器の自由という表現を使用するが、これは、「自分の性器を自分の心や顔と同じように大切にすること、すなわち自分のからだの主人公になることを指導することが、大切なのである。とくに、性器は、からだの中でもっともプライベートな場所と考えてきた人間の文化があるから、自分のプライバシーを守ることと相手のプライバシーを侵さないことは人権尊重の第一歩なのである」[7]という意味を持つ。

高橋氏は、山本氏の言う性器の自由に対し、「もしもあなたの娘が『性器の自由』を主張し、どう使っても、だれと使っても私の自由だ、と言い始めたらどうするのか」[8]と反論した。しかし、上述したように性器の自由は、そのような意味を含んでいない。「高校になっても、自分の外性器を見たことも、さわったこともない女子が、７～８割もいて、自分の外性器にふれるのはパートナーか、もしくは産婦人科医だけである」[9]ということを憂いて、山本氏は述べただけと言えよう。また、性器の指導は、性教育のほんの一部である。山本氏らが編集した副読本の「ひとりで、ふたりで、みんなと」[10]50ページのうち、たった１ページのみに性器の絵が掲載されている。それだけを取り上げて批判するのは、かえって貧しいセクシュアリティーを感じずにはいられない。

最大の相異点は、性交の指導に関してである。慎重派がよく引き合いに出すのは、山形県天童市高擶小学校の野村正博教諭の、等身大の人形を使った性交の授業である。この人形は、子どもに事実が伝わるように工夫されて作られている。この人形は、野村教諭の担任クラスで、年一回だけ使用される。この人形を使った授業は、慎重派、保守派から激しい非難を浴びた。例えば松岡氏は、この授業をストリップショーに例え、次のように論ずる。「子どもを傷つけ不安に陥れる性交の授業は、時代と子どものニーズということだけでは、大いに疑問である。この授業で五年後、十年後に、どういう影響がでるかわからないのである。学習指導方法や評価の問題なしに性交指導を行なうのは、危険である。」[11]と。松岡氏らの見た野村教諭の授業はビデオで、その人形を使った性交の授業のみである。一単位授業時間の授業のみで性交を語りきろうとする教師がいたとすれば、子どもがほんとうに傷ついたり、不安になったりすることもありえよう。しかし、性交の指導を実践する教師が、その前後の指導をしないわけはない。

1993年８月に行なわれた日本性教育学会の24回大会の小学校高学年の分科会で、同会の幹事からこんな発言があった。「日本は法治国家である。だから法にはさからえない。生まれてきた子どものことを考えたら、私生児なんてとんでもない。子どもに（性交のことを）教えるときは必ず『(性交は）結婚してから（するものだ)』というようにしてほしい。」[12]この発言に対する意見

や反論は何も出なかった。このような人権問題に関わる根底の部分で、慎重派や保守派は、推進派と背反した位置関係にある。

このように両派の主張は、「性交をどのように語るか」ではなく、「性交を教えるか否か」の点ですでに断絶していると言えよう。これはそのまま、現場の教師の意見対立となって現われてくるものと思われる。

(2) 学習指導要領と性教育の授業実践

1989年度に改訂された小学校学習指導要領の“性”に関する内容は、次の二つである。まず、保健の教科書ができ5年生に位置づけられた。内容は「(1) 体の発育と心の発達について理解できるようにする。 ア、体は、年齢に伴って変化すること。また、思春期になると、体つきが変わり、初経、精通などが起こって次第に大人の体に近づくこと。 イ、心は、いろいろな生活経験を通して、年齢とともに発達すること。また思春期になると異性への関心が芽生えること。」[13]である。理科では、3年生から6年生の間に、人体の学習が位置づけられた。そこには、「A 生物とその環境 (3) 人と他の動物を比較したり資料を活用したりして、人の発生や成長などを調べることができるようにする。 ア、人は、男女によって体のつくりに特徴があること。 イ、人は、母体内で成長して生まれること。

3年生 目、耳、皮膚と骨、筋肉。 4年生 脈拍、体温等人の活動と環境。 5年生 人の発生と成長。 6年生 呼吸、消化、排出、循環と人の周囲の環境」[14]とある。

前回の学習指導要領では、6年生のみに人体の学習があったが、発生と成長の部分は全くなかった。今回の改訂でマスコミは、“性教育元年”ともてはやし、テレビでも性教育に関わる内容が随分と取り上げられた。しかし、文部省体育局学校健康教育課教科調査官の石川哲也氏は、これに関し次のように述べた。「(今回の改訂は) 保健には精通が、理科には人の誕生が入っただけのマイナーなチェンジ」であり、「理科は理科の目標、保健には保健の目標があり、あれ (今回の改訂の中身) が性教育だといわれると、私どもは、大変恥ずかしい。」「(つまり今回の改訂は、) 性教育の視点からではなく、指導要領の視点 (理科は生物教育、保健は健康教育) からみて完璧である。」[15]ということなのである。ではいったい、性教育はどこで、どのように行なわれていけばいいのだろうか。石川氏によれば、今まで現場では、1986年に出した「性に関する指導の手引き」もあるし、「性に関する内容はあらゆる教科でとりあげることができる」[16]から、今まで現場では、性教育が実施されているはずである、というのである。そして「現時点ではトータルとして人間全体としてまとめるのに、特別活動を活用して」[18]いるはずなのである、とする。

たしかに特別活動の指導内容に、性に関するものがかなりの量明示されている。しかし、実際には、性に関する内容の指導のみに学級活動をあてることは至難の状況である。また、性に関する内容は、理解と受容に個人差があると思われるので、単に一度授業の形で指導伝達したからといって、すべての子どもたちに、一様に伝達可能となるものでもない。同じ内容を繰り返し、積み上げていくことが、新しい内容に入るうえでも、子どもたちに内容を再確認させる意味でも、必要なこととなる。それ故、時間の確保が困難な現状では、人間教育、生き方教育をめざした性教育を行なうことは、無理な状況がでてくることは否めないだろう。

もう一つの問題点は、教科書である。前述したように、文部省では、性教育という視点からは教科書を認知していないから、性教育で理科や保健の教科書を使用せざるをえない。ここに問題がでてくることになる。例えば、保健の教科書の月経の説明には、「尿のでるところの近くから血液がでることがある。」[17]とあり、挿絵は全くない。射精も「精子は、いろいろな液体と交ざっ

て精液となり体外へ出される。」[18]となっており、どこから出てくるのかは全くわからない。理科では性交をとばすので、学習の順序は次のようになる場合が多い。つまり“受精→胎児の成長→誕生→男女の体の違い”[19]である。また動物の交尾ですら、体外受精と体内受精の区別が不明確で、生命の進化の視点からみても弱いのである。

これに対し石川氏は、「教師は、指導要領を中心にみて、教科書はあくまで教材として扱うように」[20]して、「教師の力量に期待しているのだから、現場でもっと自由にされているはず」[21]であると述べている。またあわせて、指導要領を現場で読んでいるのかと危惧もしている。しかし教科書を使用しないと処罰の対象となることは知っていても、そんな自由があることを、現場ではどのくらい知っているのだろうか。

学習指導要領についての最大の問題点は、明確な指針がないことである。前回までは、担任には子どもに性に関する部分を指導することを、明記した点はなかったから、性に関する分野、内容は、すべて養護教諭まかせにできたのである。今回の指導要領は、理科や保健といった、学級担任が直接に担当する教科において改訂されたので、学級担任が性教育をしなければならないとする考え方もある。が、今もって指導要領には、“性教育”という文言はない。それ故、性教育は学校現場で、全く行なわれなくても問題はないのである。近年多数の府県教育委員会が編集している“性に関する指導書”も、手引きであるから、性教育が学校ごとに格差の生じることは当然のことと言える。子どもや地域の実態にあわせるため、性教育を一律に同じ内容にしてしまう必要はないが、性教育を行なわない学校があっても容認される現状は、やはり問題があると言わねばなるまい。

2　性教育をどう捉えるか

性教育は、学校教育だけにとどまることはなく、その対象は、胎児期から老年期までを含む生涯教育の一領域である。性教育を行なうことに対して、「寝た子を起こす」ようなことをする必要はないというものや、性非行や性犯罪の増加や低年齢化に対処したり、性被害を防止するために、社会的規範や男女間のマナーを教えるべきだという意見もあれば、処女性を尊重する教育を主張する者もある[22]。

これらの考え方は、単に性教育を子どもを対象として考えているものであり、また、人間の性器や、それに関わる人間の行動に関する教育と捉えているにすぎない。もちろん「人間の性は、その人の人格の中心的な部分に組みこまれている基本的な条件のひとつ」[23]である。それ故、「男性であるか女性であるかの事実やその認識が、その人の人生観や思考、行動の仕方や、社会的、職業的な活動、友人の選択や服装、態度などに差異をもたらす、いわば、人間の生き方を決定する要因」[24]にもなり得る。しかし、「その人の性に関する条件づけは、幼児からの成長の過程で、家庭や学校、社会における種々な人間関係や性の文化などによって」[25]もたらされるのである。つまり性教育は、“生き方教育”だから、その人の年齢等にあわせて、一生涯必要なものと言えるのである。1923年、著書「性教育」の中で山本宣治は、こう述べている。「性教育は『科学教育』である。男女の様々な面の真実を知って、無知からくるトラブルをさけたい。次に『自立教育』である。『自律、自知、自敬、自制』を養うことで、自分の心と体の主人公になることができる。さらに『共生教育』である。男女平等・人間共存の理念のために、ヒューマンな感性を育むことである。」[26]この定義は、70年前のものとは思えないほど多面的に性教育をとらえている。また、1964年にSIECUS（アメリカ性情報・教育評議会）を創設したカーケンダール氏は、SIECUSで

提唱したsexualityの概念「人間の性は全く全人格的なものと結びついている」[27]をうけて、「セックスは、両肢の間にある生殖に関わる器官であり、その行動の総称とされるのに対して、セクシュアリティーは、両耳の間にある器官、すなわち、大脳に関わる性的存在としての人間の全生涯と、全人格を包含する概念である。」[28]と述べた。

山本宣治とカーケンダールとの共通点は、性教育を、“自分がどうあるべきかを考える生き方の教育”と考えているところである。セックスは“性”で、セクシュアリティーは“性と生”であることをうければ、性教育は、sex educationではなく、sexuality educationでなければならないことが容易に理解できるだろう。

3　小学校における性教育

前述してきたように、性教育とは性器教育でも、まして性交教育でもない。自分の生き方を考える人間教育である。自分がどう自分らしく生きていくか、他人とどう関わりあっていい関係を築いていくか、という「living together」[29]教育である。性教育は、一生必要であるが、その土台を築く意味で小学校における性教育は、特に重要である。

現代の子どもたちは、学習塾や入学試験で他人と点数だけで比較されたり、競争させられたりしている。また、自分で創造したり体験したりすることが少なく、受動的に日々を送っている。自分の最終目標が、いい大学へ入ることという子どもも少なくない。その上遊びまでが、他者と関わりあいを持たずにできるファミコンで、受動的に遊んでいる。

“自分らしく”“どう生きていくか”を考えようとしても、“自分”が何をしたいのかも、どう生きていきたいのかも、考えたこともない子どもも少なくはないだろう。こうした子どもたちに、自分自身を見つめ直すきっかけを与えることは、非常に意味のあることだと思える。

小学校では、たいていの授業や行事は、男女いっしょの形で行なわれる。また、性についての歪んだ知識も、中学生や高校生に比べて少ないし、性についての固定観念もまだ小さい。今後これほどの場や機会が設定されることはなく、この好機を逃がすべきではなかろう。

性教育は性器教育ではないと前述したが、しかし性器教育を外すとまた性教育ではなくなる。外性器はへそと同じように、ふだんは着衣の下に隠れているが、自分の目で見ることができる。男子だけでなく女子もそうなのだが、何故か女子は自分自身の外性器を見ることはタブー視されがちである。月経が始まっても、いったいどこから経血が流れだしているのか、見たこともない女子は、高校生にも大学生にもいるという。内臓や血管よりもずっと身近で見ることができるのに、学習する機会がほとんどないというのも妙な話である。

また、思春期の性に関する悩みも、性器の大きさや形などは、他人と比較することで、また比較できないことで（特に男子は）上位を占める。性器を神聖視する必要もタブー視する必要もない。一人ひとり顔がちがうように、性器の形態がちがうのはあたりまえのことである。このことを、少しでも早く知っていれば、電話相談の子どもの悩みの件数もずいぶんと減るものと思うのである。それも、性器をいやらしいと思わせられる前に教えられれば一番いい。電車に乗れば、大人が女性のヌード写真が見えるスポーツ新聞を堂々と広げている環境では、果たしてそれが可能となろうか。

「子どもにとって一番知りたいことは、トイレの落書でもわかるように“性器”と“性交”。子どもの興味はそこに尽きる。」[30]そして、聞いても答えてくれない大人たちを見れば、答えを探し求めて、結局ポルノ情報に行き着く。が、それは、「大人の男たちをなぐさめるためのもので

あるから、性器や性交の情報には詳しい。しかし歪められた情報であるから、子どもは歪んだ知識を得る。」[31]この悪循環を繰り返さないためにも、性器や性交を教えることは必要かつ重要だと言えるのである。

「BODIES ARE GOOD」[32]という言葉が示すように、性器もからだの大切な一部なのである。そして、自分のからだのどこにも恥ずかしがることはないのである。例えば、足の短い人がいても、背の低い人がいても、いいのである。自分のからだも、みんなのからだも、これでいいと納得し、からだはすばらしいと思うことが、かけがえのないほど重要だと思うのである。

性交には、次の‘ア、種や子孫を残す“生殖”のため’‘イ、射精や接触を通してからだの気持ち良さを味わう“快楽”のため’‘ウ、スキンシップ（肌）やパートナーシップ（心）を味わう“ふれあい”のため’‘エ、売買春や性の商品化など性交を手段として“利益”を得るため’という四つの意義があるとされる[33]。これらは（エはアンチテーゼとしても）、子どもたちに教える内容としては必要なものである。しかし前述したように、マスコミなどには、イとエの性の快楽性が突出し、アやウはそこからほとんど見いだすことはできない。巷に氾濫した性の情報からの影響を少しでも弱めるためにも、“性交”に関する正確な情報を学校教育で取り上げることが必要だと言えるのである。

性交に関することを教える必要の直接的な理由は、子どもの疑問に答えるためである。「事実があいまいにでなく正面から語られることによって、子どもは納得し、安心できる」[34]のである。性交に“ふれず”、または「はぐらかされ、時には質問を封じられたりする」[35]ことでもあれば、かえって不審や不安につながっていく。子どもが質問してこなかったら、もう性は聞いてはいけないこととして、子どもが認識したということなのである。

小学校の段階で“性交”を扱う理由は、子どもは、性交をする側にはならない点にある。“お母さんから生まれたのに、お父さんと似ているわけ”や“どうやって受精したのか”“自分がどうやって生まれてきたのか”を知りたいだけなのである。自分が生きている証としての、また確認としての質問や疑問に、親や教師が“まだ早い”と決めつけてしまうのは、子どものためにならないと言っても過言ではない。

前述したように、性交は教える必要がないと断言する者が少なくはない。しかし、小学校現場でも、そのような風潮が存在しているのだろうか。次に奈良県小学校へのアンケート調査の結果から推察していくことにしよう。

Ⅱ　小学校の教育現場からは

1　性教育の実情把握のために

奈良県下の小学校では、性教育はどのように行なわれているのかを知り、あわせて教師側にどのような課題があるのかを把握することをねらいに、調査を実施した[36]。調査項目の柱は、①以前から指導されてきた内容としての“月経”、②新たに指導内容として入った“精通”、③最も取り上げにくくまた議論の激しい内容としての“性交”の三点とし、教育現場にどのような考え方の差異があるのかをみようとした。

調査はアンケート方式で、公立小学校に対し１校より一つの回答を回収した。実施時期は平成５年12月で、県下253校中192校から回答を得た（回収率75.8％）。

以下、結果の概略を述べ、次いで本論の中心テーマである“性交”の授業に関わる事項を取り

上げる。

2　調査結果の概略

① 約92％の学校が理科、保健の領域以外でも性に関する内容を授業で取り上げていた。

② 内容としては、“男女の体のちがいについて”は85％であったが、“心について”は10％ほど少ない。“男女なかよく”が81％であるのに対し“男女平等”は63％であった。

指導の内容は「男女のちがいは、生殖に関わる部分だけで、他の点は平等である」というより、「男女は体や考え方にちがいがあるけど、そのちがいを認めていこう」との発想が多かったようにみえた。

③ 「マスコミの歪んだ性表現に対応するもの」は39％、「性被害に対応するもの」は61％であり、「生命誕生に関するもの」は87.5％であった。

④ 直接指導にあたっている者は「学級担任」が72％、「養護教諭と学級担任」が24％、で養護教諭のみは非常に少なくなっている。

⑤ 過半数の学校で、低学年から系統的な積み上げの指導がなされており、学校規模が大きくなるほど、この傾向が強かった。その実施に関しては、「関連教科、領域を統合したカリキュラムを作成しての実施」が40％、「全体での取り組みでなく、特定の学年や教科で」が16％で、「理科、保健の教科の中で」が９％、「特設の時間を設けている」が11％であった。

⑥ 企画・立案の主体は25％が養護教諭であった。小規模校では学級担任が主体で、中規模校では養護教諭が、大規模校では保健部、校内性教育推進委員会、学年会と校内の事情で分れていた。

⑦ 保護者に理解を求める方法は、「参観日に性教育を実施する」が57％、「児童の感想をプリントにして配布する」が55％、「懇談会で報告する」が42％と、比較的学校側の配慮が感じられるものだった。その他には「担任によって様々」、「詳細な報告はしていない」や、「指導内容を前以て連絡する」、「保護者学習会を開いたり、アンケートを実施したりしている」などがあった。

⑧ 学校全体の課題については、二つ以内で回答してもらった。「教員が共通見解を持つこと」が最も多く55％で、次いで「指導要領への明確な位置づけ」、「指導時間の確保」、「系統的なカリキュラムの作成」が約30％ずつと、「教員の研修を行なうこと」約20％があった。

⑨ 性教育についての考え方には様々なものがある。子どもに何を伝えたいか、それだけとっても、教師からの意見は多様に分かれていく。加えて、教師自身の“性”の価値観まで加わると共通見解をまとめるのは困難になろう。

この傾向は、学校規模の大小や教師の年代にかかわらず、ほぼ同じと言える。また課題の傾向は、指導時間別にみてもかわりはない。カリキュラム作成の必要性は、指導時間が増えるほど低くなっている。また、指導時間の確保は、指導時間が多い学校でもなお要求が高い。性教育は、やればやるほど、もう少し時間をかけたいという、教師の願いは強まるのだろう。

3　性交の授業の実施状況

① 動植物の交尾・受精

動物の交尾について、どんな種類を取り上げているかをみると、哺乳類59％、鳥類39％、魚類70％と、それぞれ数字にバラツキがみられる。この３種類は、理科の教科書で扱うようになって

いる。しかし、出版社によって扱うものが異なり、水中での体外受精から、陸上での体内受精への、生物進化の過程を取り上げることができない。例え理科教育の目標が生物教育だとしても、生物の進化すら説明できないことになる。しかし、交尾や受精を取り上げていないのは５％にとどまったことから、交尾は扱いやすい内容と判断できる。ここから生命の誕生の説明は、人間を扱う前のワンステップというよりは、人間の性交とは切り離されて指導されているとみてよかろう。

植物の受精については79％が取り上げている。

② 性交を取り上げているか

これについては、「取り上げている」学校が36％、「今後取り上げる予定」が37％と、両者合わせて70％を超えている。逆に最も消極的な「取り上げないほうがよいと思うので取り上げない」学校は９％にとどまった。「生命の誕生」を扱っている学校は87％なので、うち約半数が、性交抜きか、あるいは動物の交尾のみの生命誕生の授業を受けていることになる。が数年後、７割強の学校で性交の授業が行なわれることになれば、今回の結果は一応評価すべきか。

児童数別には、中規模校での取り上げ率が最も低い。なお「取り上げないほうがよいと思っている」と答えた学校は、中規模校と大規模校のみであった。

低学年から性教育を始めている学校では、性交を取り上げる割合が増える。また、どのように性教育を行なっているかでみると、「全体的な取り組みでない」学校では性交を扱っている場合が少なく、カリキュラムを作成している学校ほど、扱いは多くなっている。カリキュラムを作成しているのは大規模校に多いので、規模の大きな学校になるほど、性交が扱いやすくなっているのだと思われる。ただ、カリキュラムを作成している学校でも、性交を扱う必要はないとしている学校もある。

教師の年代別では、「取り上げている」の回答は20代が最も多く、年代が高くなるほど少なくなる。若い世代の方が、性交の指導について抵抗感が小さいと思われる。性教育を行なう上での課題と重ねてみると、「取り上げている」学校の方が、教員の共通見解を持つことの必要性を述べている。性交については、やはり様々な教師の考え方があるので、実施できたから共通見解ができたということにはならないといえる。なお、授業で性交を取り上げている学校の特徴としては、「低学年から積み上げている」、「若い年齢の教師が多い」、「児童数が多い」が挙げられるだろう。

③ 取り上げない理由

ここでは、「教師が指導法を検討中」であることが45％で最も多い。次いで「指導法が一致しない」20％、「性交を教えなくても生命の大切さは語れるから」16％となり、さらに「小学生の発達段階では教える内容ではない（中・高校の内容）」、「指導要領に位置づけがない」となる。取り上げない理由や原因が子どもの側にあるものは、全体に少なかった。取り上げられない理由は、ほぼ教師側にあったと言ってもよい。

「今後取り上げる予定」の学校は「教師の指導法を検討中」が最も多かった。「取り上げないほうがよい」とする学校では、「教師の指導法の検討」より「性交を教えなくても生命の大切さは語れるから」という理由が、群を抜いて多かった。たしかに生命の大切さは、性交を抜きにしても語ることはできよう。だがそれが、教師で話し合った結果として、性交を授業の中に「取り入れない」理由とされることには、積極的な説得力はないし、性交を指導する意味そのものが取り違えられているとも言えよう。

その他の回答としては、「子どもから質問がでれば、個別に答えていきたい」とする個別指導で処理しようとするものや、「うすうすは知っているだろうと楽観視している」ものもあった。いずれにせよ、性交については、正規の指導場面には取り上げない姿勢のものと言えよう。このように捉えている学校では、どんな点を克服すれば、性交の指導が可能となるのだろうか。

④　どのような問題点を克服すれば性交の指導は可能となるのか

この点を、「今後取り上げる予定」の学校と、「取り上げたいができない」とする学校のみに質問してみた。先に述べたように保守派の人たちには、問題点や課題を克服できれば、性交を取り上げることができる、という意識があることを感じなかったので、「取り上げなくてもよい」としている学校には、この質問をしなかった。

回答で最も多かったのは「教師の指導方針の統一」で、約53％であった。次いで「指導方法に自信が持てれば」とするものが37％ほどあった。その他は、10～14％ほどの割合で「指導法がわかれば」、「指導要領に位置づけがされれば」、「教材・教具がそろえば」、「保護者の理解が得られれば」という項目が並ぶ。「エイズ教育をしなければならなくなったら」とする回答は９％であった。エイズ教育のために性交を指導する場合、時として性交が望ましくない行為として扱われる危険性がある。それ故、エイズ教育の基盤として性交を教えておくことは必要なのだが、エイズの感染ルートを教えるためだけに性交を教えるのでなく、性交を教える一環の中にエイズの指導が含まれるという考え方が望ましい。

小規模校では、規模の大きな学校に比べて、「指導法に自信を持つこと」を課題とする割合が高くなっている。また、「教材・教具の充実」を挙げることも多く、教材費が少ないことや教師の手も不足する実態を反映している。逆に大規模校では、「教師の指導方針の統一」と「保護者の理解を得ること」の課題が、小・中規模の学校より多く挙げられている。保護者の理解を得ることは、先にみたようにどの学校も工夫を重ねているが、児童数が多くなればそれだけ多様な考えを持つ保護者が増え、扱いに困難さが増すのであろう。性交はもちろんだが、性教育を行なうと通知したために子どもの登校を拒否したケースが、回答の中にあった。

性交の授業実施状況別では、「今後取り上げる予定」の学校も、「指導したいができない」学校も、「教師の指導方針の統一」と「指導法がわかれば」とする学校が多かった。

⑤　性交を指導するきっかけ

性交の授業を実施している学校は、どのような理由で授業を開始したのであろうか。「子どもが疑問に思っていたから」と「ごまかさずに教えたいから」の二つが、70～71％と非常に多くなっていた。次いで「小学生だからこそ教えなければならない」とする、積極的な考え方が32％と、ここまではすべて、子どもの立場にたった理由が挙げられた。性交の指導ができない理由のトップだった「共通理解」は17％にとどまっていた。共通理解の難しさは感じていてもまず、子どもが疑問に思っていたら、それに答える内容を授業の中に取り入れるという、子どもの立場に立った思い切りのよさを感じる。ただし、「エイズ教育のため」とするものも20％ほどあった。

⑥　性交を指導する学年

性交を指導する学年を複数回答を条件に質問した。ここでは、５年生が67％で最も多く、次いで６年生55％、４年生29％となり、３年生以下は順にほぼ10％ずつ減少している。

これを、単一学年で終わるのか、複数の学年にわたって行なうのかを問うたところ、58％が単一学年で終わるとしていた。指導の対象がほぼ高学年であることから、いわゆる推進派が言うところの“性交の指導は早いほど、子どもの心にストンと落ちる”という見解は、まだじゅうぶん

受容されていないように思われた。複数の学年にわたっての、しかも早期からの指導によって子どもたちの中に定着させていく指導が、今後の課題となりそうに思えた。

⑦　指導した結果はどうだったか

性交を指導してよかったかどうかについて聞いたところ、「まあよかった」を含めて肯定した学校は89％であった。結果は「よくなかった」と答えた学校は０％だったので、性交についての指導の結果、子どもたちの反応が悪い方へ流れていくことはあまりない、と受けとれる。“案ずるより産むがやすし”なのではなかろうか。

今後引き続き性交の指導を行なっていくかと聞いたところ、「続ける」とする学校は87％であった。意見を保留した学校が６％あったが、「続けない」とする学校は皆無であった。一度取り組むと必要性が実感されるのだろう。

Ⅲ　考察と課題

本論では、性交の指導が小学校での性教育において必要かつ重要なものとの仮説から、いわゆる推進派に組みする立場で、性教育の組み立てと実施の方向を論じてきた。この方向性は、奈良県の小学校へのアンケートの回答から、ある程度は証明されたと感じている。だが、アンケートの質問項目が、課題と実施の表面に限られていたことから、なお詳細と細部にわたる資料の収集が必要であることもまた感じている。

そこで若干の考察を加え、今後の我々の研究の方向を確認していきたい。

まず、前述のアンケートでは、性交の授業の細部の内容と授業の組み立てが、じゅうぶん明確に把握できていない点がまず挙げられる。性交には、生殖、ふれあい、快楽、利益の四つの内容面があることは前述した。性交を教えるならば、これらの内容を指導すべきものとして捉えるべきであるが、小学校では特に、生殖の部分が突出しがちになるのではないか、と思われる。例えば、1989年に大阪府教育委員会が出した手引書によれば、魚やパンダの交尾の挿絵はあっても、人間は、子宮のあたりと精巣のあたりをパイプでつないだ、まるでロボットのようなお父さん、お母さんの図があるのみである[37]。このような図で愛情やふれあいの大切さを伝えることは可能だろうか。

このような図を使った性交の授業や、図や絵を全く使用しないで、国語の辞書のように説明だけで終わってしまう授業が、また、愛情やふれあいや家族について十分に考慮された授業等が、すべて「性交の指導をしている」範疇で、先のアンケートで回答されていることは否定できないだろう。

しかし学校現場では、性教育学者が“教える”“教えない”という、いわば“入り口”の論争をしている現在でも、性交の授業を行なうことについて積極的である。どの内容を、どのような方法で指導していくか、学校現場の方が、学者を一歩リードする形で進んでいるとも言えるだろう。アンケートの自由回答の中に次のような意見があった。「子どもたちの疑問は、どのようにして精子が女性の体内に入るのか、という点である。そんなときはごまかさず、さらっと受け答えするほうが、子どもにとって自然に受けとめられるように思う。高学年になって突然性交を取り上げるのではなく、低学年からの指導が必要だと思う。」と。たぶんこの学校での考え方は先導的な意見とみられようが、子どもたちの側にたってみれば、ごく自然であたりまえの重要な問題提起と捉えることができよう。

前述したように、性交の指導は、約60％が、単一の学年のみで終わっている。しかも、指導学年で半数を超えたのは5年生と6年生のみである。上の意見からみれば、それでは遅いと言うことができる。

また次のような意見もあった。「マスコミが発達して精情報が氾濫している時代、文部省の見解は、小学校の段階では“性交”は教えなくてもよいということだが、それはおかしいのではないだろうか。こんな時代だからこそ、子どもたちにまちがった知識をうえつけたマスコミより先に、正しい知識を身につけさせたいと思う。子どもたちも、低学年のうちに性交を指導しておくと、いやらしいとする感情もなく、思春期にも指導しやすいのではないかと思う。」　このように、性交の指導は、低学年から行なっても決して早すぎることはないと言ってもよい。子どもたちは、性の情報にあふれた日常生活を送っている。手をのばせば、すぐにポルノに接することができる。その情報量は、学校のそれが1とすれば、たぶん20とも30とも言えるほどの量である。学校はほんの少し抵抗しているにすぎない。でも抵抗をやめるわけにはいかない。子どもたちの周囲には、歪んだ性の情報が多すぎるから、何が正しいことなのかを、知らせ、理解させておくことが、子どもたちを救け助けていく武器になるのである。アンケートの結果をみても、性交を教える理由は、子どもたちに“教師が”答えようとした姿勢をとっている状況を、また教えられない理由は、“教師が”答えられない状況を示していると、理解できた。大人が教師が変われば、明らかに子どもたちも変わることができる。

ここで述べた意見は、我々が今後とるはずの立場を代わって表明してくれたものと位置づけておきたい。ここを出発点として、小学校低学年から性交の指導を行なうとしたとき、どのような条件づくりが必要となるのか、まずこの課題がでてくる。この課題解決のために、小学校の教師たちの性に関する意識の把握と学校での性教育の必要かつ十分な内容の確定が求められよう。それは当然のこととして、教師の研修機会の確立と教材・教具の開発や製作、保護者との連携による指導プログラムの確立、などの課題を含んでいる。幸い、外国で作成され、実際に使用されている教材や教具等も入手できるようになってきている[38]。また熱心な教師たちによる工夫された自作の教材・教具もある。

我々は今後、これら先達の教師たちに学びながら、性教育の望ましいあり方を模索していきたい。かつて戦後に、民主主義社会における同和教育の必要性と重要性、そしてその創造が言われながら、実際それぞれの学校において先導的な役割を果たした教師たちが、いかに苦闘を強いられたかの状況を思い出す。今、性教育も同様な地平に置かれていると言えよう。ようやく前進のための橋頭堡ができあがりつつある今日である。目標と見通しはあっても、障害物は目前に山積している。その一つひとつを除去しながら、前進する教師たちを見つめていくことにする。

注および引用文献

(1)　日本性教育協会：改訂　性教育指導資料解説書，1984，p 9
(2)　田能村祐麒：性と生命の教育－エイズ教育の課題，現代のエスプリ，309号，至文堂，1993，p 4
(3)　佐橋憲次、山本直英、村瀬幸浩編：講座『人間と性の教育』別巻，あゆみ出版，1986，p 19
(4)　第20回　日本性教育学会大会要項にある　黒川義和氏の定義による．1989，p 5
(5)　山本直英：「ここまできている小学校の性知識」，週刊文春，1992，p 47
(6)　高橋史郎：「小学校の『性教育』これでいいのか」，週刊文春，1992，6月11日号，p 197

(7) 山本直英：子育てのなかの性教育，大月書店，1989，p 82
(8) 高橋史郎：前掲論文，p 197
(9) 山本直英：「とっておきの『セクシュアリティー』の話」月刊　高校生，No.100，1992，6月号
(10) 山本直英、高柳美知子　監修：小学生用性教育副読本，東京書籍，1991
(11) 松岡弘：性と生命の教育－エイズ教育の課題，現代のエスプリ，309号，至文堂，1993，p 22
(12) 第24回　日本性教育学会大会，「小学校上学年における性教育」の分科会での発言より――記録者，高森裕子
(13) 小学校学習指導要領，「保健体育編」
(14) 同上書，「理科編」
(15) 石川哲也：「教科書はあくまで教材」，ヒューマン　セクシュアリティー，No.7，1992，P 27
(16) 同上論文
(17) 教科書『新しい　保健』，東京書籍，1991、P 7
(18) 同上書
(19) 平林宏美：「教科書の問題点をさぐる」，ヒューマン　セクシュアリティー，No.7，1992，p 31
(20) 石川哲也：前掲書，p 27
(21) 同上書，p 29
(22) 日本性教育協会：前掲書，P 8を要約した
(23) 同上書
(24) 同上書
(25) 同上書
(26) 山本直英担当：性教育（「知恵蔵」より），朝日新聞社，1993，p 459
(27) 日本性教育協会：前掲書，P 14
(28) 講座『人間と性の教育』別巻，　P 147
(29) 山本直英：「性教育の新たな展開を目指すとき」，ヒューマン　セクシュアリティー，No.7，P 8
(30) 山本直英：「ここまできている小学校の性知識」，P 48
(31) 同上論文
(32) June Harnest：The Sex Education of Susie & Fred（山本直英訳，『スージーとフレッド』，ダイナミックセラーズ，1990）
(33) 山本直英：月刊　高校生，所収論文
(34) 村瀬幸浩：「生きる自信を育てる－性交をなぜ教えるか、どう語るか」，雑誌「子どもと教育」，1993年8月臨時増刊号，あゆみ出版，1993，P 25
(35) 同上論文
(36) 高森裕子の卒業論文に調査結果の詳細が挙げられている
(37) 大阪府教育委員会編：「性に関する指導の手引き」，1989
(38) 山本直英訳『スージーとフレッド』など

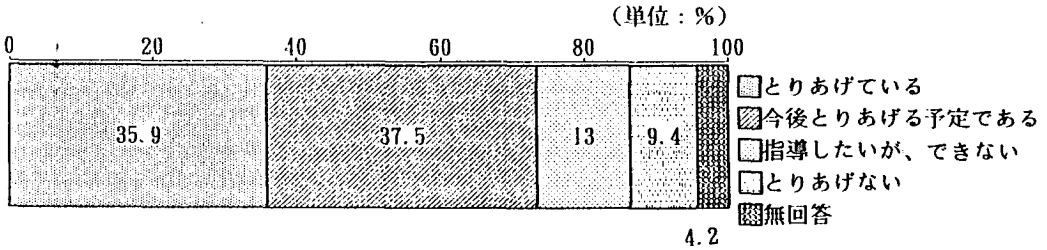

図1　性交についてとりあげているか

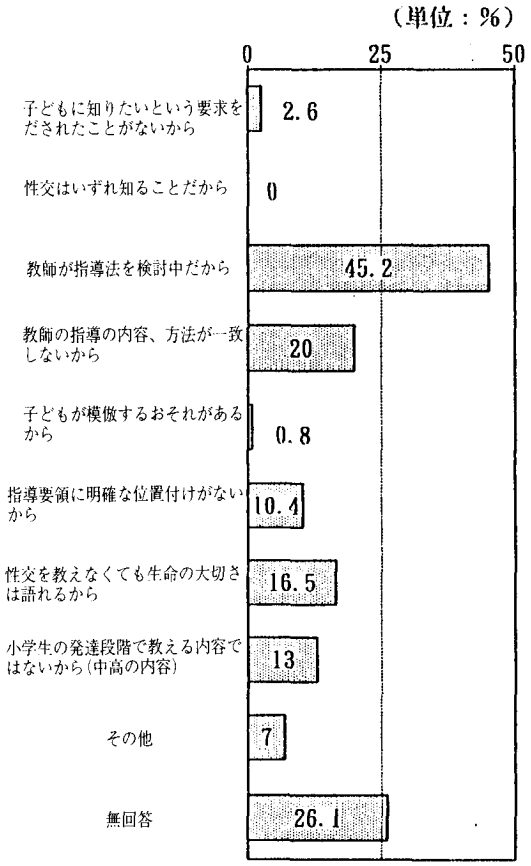

図2　性交をとりあげていない理由
(性交の指導をしていない学校のみ回答／115校)

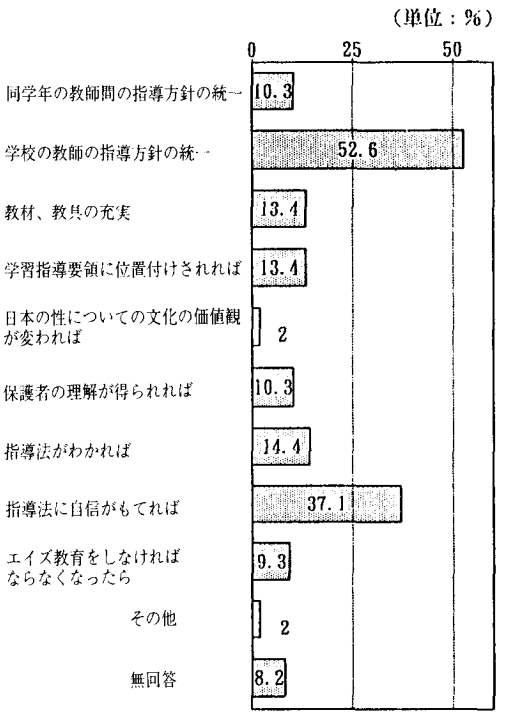

図3　何を克服できたら性交の指導はできるのか
(該当する学校のみ回答／97校)

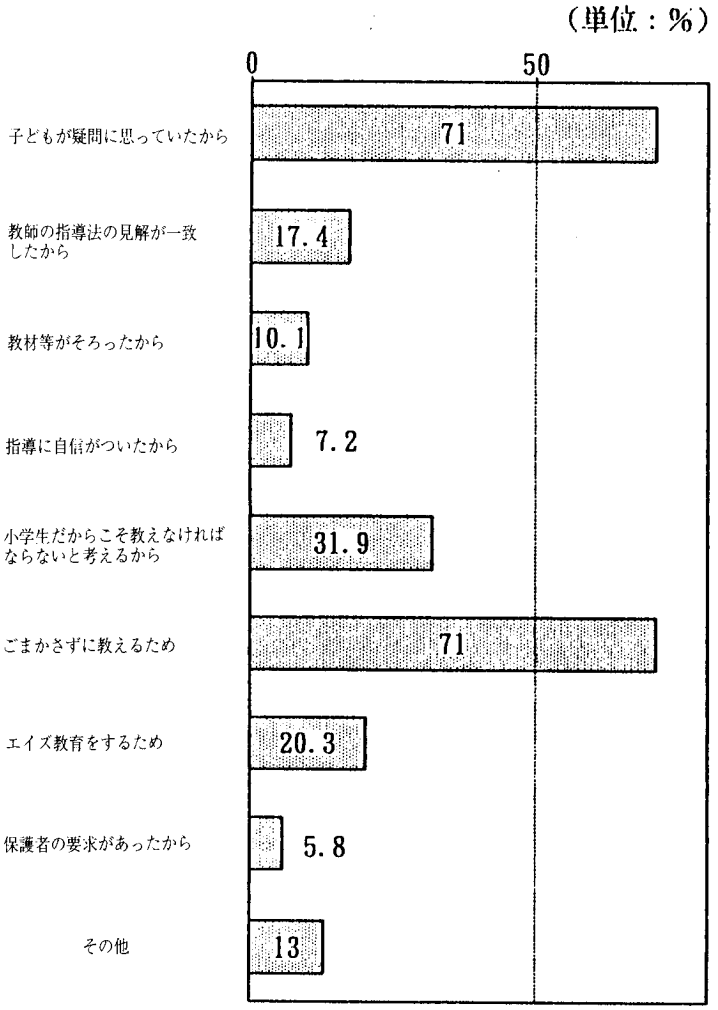

図4　性交について指導したきっかけ
（性交の指導をしている学校のみ回答／69校）

An Introduction of Sexuality Education in Primary School

Seiya GOTO and Hiroko TAKAMORI
(*Department of Pedagogy, Nara University of Education, Nara 630, Japan*)
(Received April 28, 1994)

The discussion of sexuality education has been the most controversial issue since 1990. The revision of the Course of Study has led to teach sexuality in the subjects of natural science and health education.

There are many problems to solve what should be the content of sexuality education, how to teach and what extent we are supposed to teach to. Teaching sexual intercourse, as a matter of course, is the most embarrassing question for every teachers in primary schools.

Now in Japan, sex-educationists' views of teaching of sexual intercourse are divided into two groups. Both groups agree that sexuality education is not only illustrating genitals and teaching their function, but respectively showing their own ideas about content and the way how to teach that.

One group insists that they need not teach genitals because the mere teaching of genitals could not be sexuality education, while the others assert that without to teach genitals they could not give the true recognition of sexuality.

According to those separate standpoints, the former asserts that we should not include the sexual intercourse in sexuality education, but the latter asserts that we must include the sexual intercourse as the essential item of sexuality education. Here we take the stand of the latter opinion.

In the case of primary school children, we might sometimes feel embarrassed in teaching the sexual intercourse, but considering the circumstance around children, the harmful effects were instilled by mass media, of which we are afraid they can often be inadequate or unnecessary sorts of imformation. So we should throw a new light on the sex or sexuality and lead children to the right direction.

We inquired into the prevailing state in primary schools in Nara Prefecture about the sexuality education (their teaching plans, method and content etc.).

We knew the following facts. In 90% or more of schools inquired sexuality education is under way, and they refer to the teaching of sexual intercourse, 36% of the whole schools actually introduced it into their class, and 37% think about translating their plans into practice at an early stage. The teachers of such schools have tried to answer to childrens' questions correctly.

However there are many ptoblems awaiting solution with our efforts. We have to press for the sexuality education including the item of sexual intercourse as the key matters.

For that purpose we must research many problems; such as teachers'concern about sexuality, the decision upon more specified content of sexuality education, increasing the opportunity of teachers in-service training, the development of teaching materials or tools, the negotiation with parents about sexuality education, and all that.